

Overview

2026年の世界経済～高値警戒感をどう乗り越えるか

大和総研 経済調査部 シニアエコノミスト 佐藤 光

2025年は、株価をはじめマーケットの価格が大幅に上昇した一年となった。日経平均株価やNYダウ平均株価、国際金価格などは、2024年に続いて史上最高値を更新した。ただし、価格に関しては過去との比較からは高値警戒感もささやかれ始め、先行きへの見方は分かれつつある。2026年のマーケットについては、高値警戒感からやや落ち着かない展開となる可能性もある。

マーケット価格について、実体経済面の要因のみでは説明しにくい部分の評価が、どう変化するかがカギになる。投資家の評価が変わるきっかけとなり得る要因には、地政学リスクや災害、感染症などの不可抗力が強いものもあるが、足元は政策当局が動かす金融政策や財政政策のかじ取りも難しい局面だ。欧米を中心とした利下げや財政拡張策は、インフレとの兼ね合いでどこまで進むのか予断を許さない一方、日本では利上げと財政拡張策の両立も容易ではない。マーケットの動向は、資産効果を通じて主に高所得層の消費動向に影響し得るため重要な。

他方で、世界的な供給制約への不安等を背景に消費者のインフレ期待が定着してきたこともあり、物価上昇率も世界的に高止まりの気配がある。それに対し、主要国では雇用環境の軟化や関税引き上げに伴う貿易への懸念など、経済の先行きへの不透明感も指摘される。これを企業などの供給側からみると、物価にも高値警戒感が生じつつあるといえそうだ。日本での身近な例としては急騰したコメ価格が挙げられ、足元では価格高騰による消費の低迷や在庫の増加が伝えられている。このような物価の高値警戒感は、近年高水準が続いている賃上げ動向にも影響しよう。労働者の賃金上昇率は、主に中低所得層の消費動向にとって重要な。

十二支では、2026年は午（うま）年となる。日本株の相場格言には、「辰巳天井、午尻下がり」とうたわれる。マーケットに限らず、ここ2年ほどの龍（辰）に乗ったかのような高騰による浮遊感に身を任せのではなく、地に足を着けて駆け抜ける年にしたい。

主要国実質GDP見通し^く要約表> (2025年12月24日時点)

	2025年				2026年				(前年比%)								
	1-3		4-6		7-9		10-12		1-3		4-6		7-9		10-12		
日本	1.5	2.1	-2.3	1.0		1.4	1.2	1.0	1.0	0.7	-0.2	1.2	0.8	<u>-0.0</u>	<u>0.5</u>	<u>0.9</u>	<u>0.9</u>
米国	-0.6	3.8	4.3	1.0		2.8	1.8	2.0	2.1	2.9	2.8	2.1	2.4				
ユーロ圏	2.3	0.6	1.1	0.9		1.2	1.4	1.5	1.5	0.4	0.9	1.4	1.2				
英国	2.7	0.9	0.4	-0.3		1.4	1.4	1.6	1.8	0.4	1.1	1.3	1.0				
中国	5.4	5.2	4.8	4.4		4.5	4.4	4.4	4.2	5.2	5.0	4.9	4.4				
ブラジル	3.1	2.4	1.8	N.A.		N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	3.2	3.4	2.2	2.0				
インド	7.4	7.8	8.2	N.A.		N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	<u>9.2</u>	<u>6.5</u>	<u>7.2</u>	<u>6.9</u>				
ロシア	1.4	1.1	0.6	N.A.		N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	4.1	4.3	0.6	0.9				

(注)グレー部分は予想値、それ以外は実績値。四半期伸び率は、中国、ブラジル、インド、ロシアは前年比、それ以外は前期比年率。

(出所)各種統計より大和総研作成